
凝視

BAU

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凝視

【Nコード】

N6762E

【作者名】

BAU

【あらすじ】

飼い犬の最後に立ち会った少年の思い出

彼は今でも僕を凝視しているのだろうか？

ギラギラと銀色に輝く荒霜が盛り上がる真冬の早朝である。

ゼイゼイと荒い息切れの中で、彼は僕をじつと凝視している。

肩を抱き上げてだらりと下がり落ちた頭を抱えながら、僕は何も出来なかった。

我が家に飼われてから8年目の冬である。

飼われた当初には歩くことすらおぼつかなかった子犬であったが、今では大人すら身を引くような大型犬である。

近所中の評判になる程に筋肉隆々となり、家中の靴を台無しにするほどのやんちゃものであった。そんな彼が今年の夏ごろより妙な咳をしはじめた。

屋外で変われる犬にとっては致命的なフィラリアであった……。先月には腹に水が溜まり、腹が地面に着く程まで膨らんでしまった。妙な泣き声を聞いて犬小屋に行ってみると、彼はおどろおどろしい様相で僕を睨んでいた。

何も出来ないまま彼を抱き上げた僕は、ただ彼を見守るしか出来なかった。

徐々に息遣いが荒くなり、その吐息は冬の寒さで瞬く間に白くなり、生臭い匂いが立ち込めた。遂に彼はビクビクと震えだして…、最後には思わず僕は目を伏せた。

恐怖でもなく、非情でもなく、無念でもなく、彼の僕を見続ける無情性に対して、僕はしばらく目を開けられなかった。

東の空が明るくなる頃僕は彼を小屋に移して、彼が愛用していた布切れを彼に被せた。

朝になり母が“ムクは布に覆われて冷たくなっていたよ”と、僕に気を使いながら彼を家にリビングへ上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6762e/>

凝視

2010年10月21日23時44分発行